

J. S. バッハ作曲「三声シンフォニア」の楽曲分析と演奏解釈

—第5番 変ホ長調 BWV 791—

藤 本 逸 子

はじめに

この小論に先立ち、「J.S. バッハ作曲『二声インヴェンション』¹⁾の楽曲分析と演奏解釈」²⁾と題し、「第1番 ハ長調 BWV772³⁾」から「第11番 ト短調 BWV 782」までの11曲を、「豊橋短期大学研究紀要 第2号」から「同第12号」の各号に、それぞれ楽曲分析し演奏解釈した。また、「第12番 イ長調 BWV 783」から「第15番 ロ短調 BWV 786」までを、「豊橋創造大学短期大学部研究紀要 第14号」から「同第17号」に、同じく楽曲分析し演奏解釈した。続いて、「J.S. バッハ作曲『三声シンフォニア』の楽曲分析と演奏解釈」と題し、「第1番 ハ長調 BWV787」から「第4番 ニ長調 BWV 790」を、「豊橋創造大学短期大学部研究紀要 第19号」から「同第22号」に、楽曲分析し演奏解釈した。この小論も、それらと同じ観点にたつて、「三声シンフォニア」の「第5番 変ホ長調 BWV 791」を取り上げたものである。

楽曲分析と演奏解釈

「Sinfonia 5」は、全く対位的な作風を感じさせないわけではないが、30曲ある「二声インヴェンション」「三声シンフォニア」の中では珍しく、非常に和声的作法で作られている。下声部は、常にアルペジオを奏することで、上の二声を和声的に支えており、旋律的に表に出ることはない。

J.S. バッハは、後になって「Sinfonia 5」に多くの装飾音を加えた。おそらく、多様な装飾法を示すことで、弟子達に実際に演奏する場合の当時の演奏形式における可能性を教授したのであろう。この小論においては、装飾を含まないかたちの楽譜を用いて、楽曲分析を進めていく。

1) 「二声インヴェンション」と「三声シンフォニア」という呼び名については、豊橋短期大学研究紀要第2号「J.S. バッハ作曲『二声インヴェンション』の楽曲分析と演奏解釈」藤本逸子1985年（以下「第2号における小論」）の「『インヴェンション』について」の項を参照のこと。

2) 作品名・書名・強調語句は、原則として「 」に入れて表わす。

3) BWV=Bach-Werke-Verzeichnis, W. シュミーダーによるJ.S. バッハ作品総目録番号。

「W.F. バッハのための小曲集」⁴⁾において、この「Sinfonia 5」にあたるのは、61番目の曲で、「Fantasia 13」(BWV 791)と題されている。双方には、表Iに示したような多くの違いが見られる。その違いの多くは、リズムの違いやスラーのあるなしであるが、その中で、際だつ違いは、「Sinfonia 5」は、全曲が38小節で成り立っているが、「Fantasia 13」は、2小節少ない36小節で作られていることである。その「Fantasia 13」にはない2小節は、「Sinfonia 5」の[18]～[19]⁵⁾にあたる。

表I 「Sinfonia 5」と「Fantasia 13」の相違箇所

Sinfonia 5		Fantasia 13	
[6]	上声1拍め 前打音なし	[6]	上声1拍め 前打音あり
[11]	上声1～2拍め 四分音符 タイ 付点 八分音符 十六分音符	[11]	上声1～2拍め 付点四分音符 八分音 符
[12]	上声3拍め 装飾音	[12]	上声3拍め 装飾音なし
[14]	中声1～2拍め 四分音符 タイ 付点 八分音符 十六分音符	[14]	中声1～2拍め 二分音符
[16]	上声2～3拍め 八分休符 十六分休符 十六分音符 付点八分 音符 十六分音符	[16]	上声2～3拍め 四分休符 四分休符 中声2～3拍め 八分休符 十六分休符 十六分音符 付点八分 音符 十六分音符
	中声2～3拍め 四分休符 四分休符		下声3拍め G音
	下声3拍め D音 ⁶⁾	[18]～[19]	[18]～[19]にあたる小節はない。
[18]～[19]		[18]	上声1～2拍め 四分休符 八分休符 十六分休符 十六分音 符
[20]	上声1～2拍め 付点八分音符 十六分 音符 付点八分音符 十六分音符	[19]～[20]	上声3～1拍め タイ
[21]～[22]	上声3～1拍め タイなし	[21]	上声1拍め E音
[23]	上声1拍め B音	[22]	上声2～3拍め スラーなし 中声2～3拍め スラー
[24]	上声2～3拍め スラー 中声2～3拍め スラーなし	[24]	下声3拍め 1オクターブ高いDes音
[26]	下声3拍め Des音	[26]	上声2～3拍め スラーなし 中声2～3拍め スラーなし
[28]	上声2～3拍め スラー 中声2～3拍め スラー		

4) 「W.F. バッハのための小曲集」については、「第2号における小論」の『インヴェンション』について」の項を参照のこと。

5) 小節数は、数字を□で囲むことによって表わす。例、第4小節め→[4]、第3小節めから第10小節め→[3]～[10]。

6) 音名は、原則としてドイツ音名で表わす。例、変ロ音→B音、嬰へ音→Fis音。

楽曲分析 (譜¹⁷⁾ 参照)

この曲は、二つの部分からなり、それぞれの部分は、次のような構成になっている。

第1部	1 ~ 16 (16)	第2部	17 ~ 38 (22)
主 題	1 ~ 4 (4)	変 奏 3	17 ~ 24 (8)
変 奏 1	5 ~ 8 (4)	変 奏 4	25 ~ 28 (4)
変 奏 2	9 ~ 12 (4)	主 題	29 ~ 32 (4)
主 題	13 ~ 16 (4)	変 奏 5	33 ~ 38 (6)

各部分における楽曲分析

第1部

主 題

- 1 ~ 4 ・ 上声部では、1 ~ 2 に、十六分音符・付点八分音符・十六分音符・四分音符からなり、4度跳躍上行・2度順次上行・3度跳躍下行と続く要素 (a) がある。この (a) は、主題 (aT) としての働きをしているが、多くの変化が加えられて、変化主題としても活躍する。2 ~ 3 には、(aT) と同じリズムで、2度順次上行・2度順次上行・3度跳躍下行と続く要素 (b) がある。この (b) は、(aT) の対旋律的性質を持ち、(aT) と共に動いている。3 ~ 4 では、1 ~ 2 の2度上に (aT) がある。4 ~ 5 では、2 ~ 3 の2度上に (b) がある。
- ・ 中声部は、2 から始まる。2 ~ 3 では、1 ~ 2 の上声部の (aT) を追うように、その4度下で (aT) を奏でている。3 ~ 4 も 2 ~ 3 の上声部の (b) を追うように、その4度下で (b) を奏でている。4 ~ 5 も 2 ~ 3 と同様、3 ~ 4 の上声部の (aT) を追うように、その4度下で (aT) を奏でている。
 - ・ 下声部は、十六分休符・十六分音符・十六分音符・十六分音符・四分音符・四分音符というリズムで、オステイナート風にアルペジオをかき鳴らしている (c) がある。(c) は、カデンツで若干のリズム的变化があるが、全曲を通じてアルペジオの音形を保っている。

変奏1

- 5 ~ 8 ・ 5 ~ 6 上声部は、(aT) と同じリズムで、4度跳躍上行・完全1度・5度跳躍下行する (aT) の変奏1 (a₁) がある。この (a₁) は、続いて6 ~ 7 においても2度下で奏される。5 ~ 6 中声部は、上声部の (a₁) に対応して、長音符で、2度順次下行している。この上声部と中声部の動きは、7 ~ 8 で、声部を入れ替えて4度下で奏され、主調を確保するように Es dur⁸⁾ で変奏1を終えている。

7) この小論における「Sinfonia 3」に関する楽譜は、Johann Sebastian Bach「Inventionen und Sinfonien」Urtext (Bärenreiter-Verlag, Kassel 1972) を用いている。国内においては、ベーレンライター社の許可を得て、全音楽譜出版社が、印刷出版している。

- ・ [5]～[8] 下声部は、忠実に (c) を鳴らしている。特に [8] では、短いカデンツ (K) を支える動きをしている。

変奏2

- [9]～[12] ・ [9]～[12] 上声部と中声部は、[9]～[10] で (a₁) が反行したような (aT) の変奏2 (a₂) が、中声部・上声部の順に掛け合いで現れ、[11]～[12] の (b) の拡大形 (b×) とその反行形 (q×) を利用した (K) に繋がり、平行調の c moll に転調して変奏2 を終えている。
- ・ [9]～[12] 下声部は、[9]～[10] と忠実な (c) を置いた後、[11]～[12] では、若干の変形が加えられて (K) らしい動きとなっている。

主 題

- [13]～[16] ・ [13]～[16] 上声部と中声部は、4度跳躍上行・2度順次上行・4度跳躍下行と、最後の下降音程が違うもののほぼ主題の形を保った (aT) が、[13]～[14] で中声部・上声部の順で現れ、[15]～[16] では [11]～[12] のように、(b) の拡大形 (b×) とその反行形 (q×) を利用した (K) に繋がり、第1部を B dur で、終えている。
- ・ [13]～[16] 下声部は、(c) の形を保ったままで (K) の働きも果たしている。

第2部

変奏3

- [17]～[24] ・ [17]～[24] は、「Fantasia 13」にはない [18]～[19] の2小節を加え、より自由な (aT) の変奏を楽しんでいる。
- ・ [17]～[18] の上声部と中声部は、音程間隔は多少違ってはいるが、(aT) の反行形のような変奏3 (a₃) を上声部・中声部の順に置いている。
- ・ [19]～[20] では、(a₃) をさらに変化させた (a₄) を上声部・中声部の順に1拍遅れに配してストレッタとした後、上声部に (aT) と中声部に (b) を置いて落ち着かせている。
- ・ [21]～[24] は、上声部に (a₁) を2回置いた後に、上声部も中声部も (b×) と (q×) を使った (K) に入り、B dur に始まった変奏3 を f moll に終わらせている。中声部では、[21] (a₁) と同時に (a₄) の反行形 (a₅) を鳴らして対旋律のような効果を出させている。
- ・ [13]～[16] 下声部は、(c) の形を保っている。[23]～[24] も [15]～[16] の下声部同様、(c) の形を保ったまま (K) の働きを果たしている。

変奏4

- [25]～[28] ・ [25]～[28] 上声部と中声部は、(a₅) を中声部・上声部の順に置いた後、両声部とも (q×) を使った (K) に入り、As dur に終止させている。
- ・ [25]～[28] 下声部は、[25]～[26] と (c) の形を保ち、[27]～[28] では、[11]～[12] と同様

8) 調名は、原則として、ドイツ音名を用い、ドイツ音名の太文字は長調、小文字は短調を表わす。例、ハ長調→C durあるいはC:, イ短調→a mollあるいはa.

の変化をして、(K)らしい動きをしている。

主 題

29～32・29～32は、上声部・中声部・下声部の3声部とも1～4を5度低くし下属調のAs durで再現している。ただし、30の(b)だけは、音程が変化している。

変奏5

33～38・33～38は、5～8の変奏1に似ているが、この変奏5の中で、As durから主調のEs durに戻り、全曲を閉じている。

- ・33～38は、変奏1同様(a₁)が出ているが、変奏1とは違って、ここでは、上声部・中声部・中声部・上声部と、(a₁)が4回出てくる。また、最初の上声部に出る(a₁)に対して、中声部には(b)が付され、(aT)と(b)の関係を模している。その4回の(a₁)の後に、最後の跳躍下行音程だけ変化した(aT)が続ぎ、唐突とも思えるような曲の終了の仕方をしている。
- ・33～38下声部は、(c)の形を保ち、全曲の終了といえどもその形をくずしていない。

演 奏 解 釈 (譜2・譜3・譜4参照)

テンポ

テンポに関して、諸校訂版⁹⁾は、表IIのような指示をしている。

表II 諸校訂版における「Sinfonia 4」のテンポに関する指示

校 訂 者	テンポに関する指示
Hans Bischoff	Andantino ♩ = 52
Ferruccio Busoni	Andante espressivo
Alfredo Casella	Andante espressivo
S.A. Durand	Molto moderato
James Friskin	Andante sempre cantabile ♩ = 40—44
Vilém Kurz	Andante espressivo
Wm. Mason	Andante
G.E. Moroni	Allegro moderato ♩ = 100
Bruno Mugellini	Andante sostenuto ♩ = 96
Julius Rötgen	Andante ♩ = 54
井口 基成	Andante espressivo
千倉 八郎	Andantino ♩ = 46

9) 各校訂版及び、各CDの出版については、本小論の「参考文献・参考楽譜・参考CD」の項を参照のこと。

また、内外10人の演奏時間は、表Ⅲのとおりである。

表Ⅲ 諸演奏家における「Sinfonia 5」の演奏時間

演奏者	録音年	楽器	演奏時間
Aldo Ciccolini	不明	ピアノ	2' 34"
Christoph Eschenbach	1974年	ピアノ	3' 18"
Glenn Gould	1963～64年	ピアノ	3' 08"
Tatyana Nikolayeva	1977年	ピアノ	1' 45"
András Schiff	1982～83年	ピアノ	2' 14"
高橋 悠治	1977～78年	ピアノ	2' 53"
田村 宏	不明	ピアノ	2' 31" 2' 47"
Kenneth Gilbert	1984年	チェンバロ	2' 06"
Gustav Leonhardt	1974年	チェンバロ	2' 56"
Helmut Walch	1961年	チェンバロ	3' 01"

いずれの演奏も下声部を撥弦楽器を思わせるタッチで演奏している。田村が、装飾音のないものと装飾音をつけた演奏と二通りしている（上記、田村の演奏時間の前者は装飾音なしの演奏、後者は装飾音をつけた演奏時間である）以外は、装飾音なしの演奏はなかった。装飾音も、装飾音付楽譜に付されている装飾音を全て忠実に演奏するというより、取捨選択した演奏が多かった。

上記の音になっている演奏に、大きな驚きはなかったが、校訂版のモリーニの「♩=100」の指示には驚いた。校訂楽譜には、装飾音も加えられているので、装飾音なしの演奏を想定している速さではない。この指示に従えば、かなり忙しい演奏になりそうである。ブゾーニ版には、「四分音符ではなく、十六分音符を基準音符にして練習することを勧める」とある。それは、練習段階へのアドバイスであるとしても、ブゾーニとモリーニとは、ずいぶん考え方が違う。

筆者は、装飾音を加えるならば「Adagio espressivo ♩=40」という遅いテンポをとり、美しさを充分楽しみたい。

アーティキュレーション

低声部は撥弦楽器を想定し、十六分音符も四分音符もノンレガートとする。上声部と中声部は、木管楽器か擦弦楽器をイメージしてレガートに演奏し、装飾音の美しさを際立たせたい。

装飾音

装飾音は非常に多いので、実音で記して楽譜とし、上声部（譜3）・中声部（譜4）別に示した。なお、演奏解釈譜の装飾記号に（ ）をつけたものは、装飾音をつけない方がよいと判断したところで、譜3と譜4には、その判断が反映している。

各部分における演奏解釈

- 1 ~ 4
- ・全曲、充分 *espressivo* に奏でる。低声部を丁寧に *P* で奏で、上声部を誘い出すように始める。低声部は、常に上声部と中声部の伴奏に徹し、全曲を通じて低声部が自ら何かを主張するようなことはない。
 - ・上声部と中声部の (aT) は、音の上行・下行にそって、細かく *cresc.* と *dim.* する。
 - ・(b) は、(aT) にそうように奏でる。
 - ・「主題」の終わりの 4 ~ 5 にかけては、少し音量を下げ、少々納めた感じを出す。
- 5 ~ 8
- ・変奏1の最初の (a₁) は、曲の始まりよりほんの少々音量を上げ、2回目 (a₁) は、最初の (a₁) の影のように少々音量を落とす。3回目の (a₁) は、また少々音量を落とす。
 - ・8 ~ 9 カデンツは、中声部の上行する音形にそって *cresc.* した後、静かに、しかし、しっかり *Es dur* の調性を確保するように終止する。
 - ・下声部は、カデンツのバスの動きに留意する。
- 9 ~ 12
- ・変奏2では、装飾音を効果的に生かして、(a₂) の塊で *cresc.* する。この *cresc.* にともなって *Es dur* から *c moll* に転調する切なさを表現したい。変奏2の上声部に出てくる2度目の (a₂) に第1部のクライマックスがある。
 - ・11 ~ 12 のカデンツは、クライマックスの興奮を静めるように納める。
- 13 ~ 16
- ・主題は、*c moll* で始まるが、すぐに *B dur* に転調していく。おちついて (aT) を奏で、カデンツを健康的に響かせて、第1部を終える。
- 17 ~ 24
- ・第2部の変奏3は、*mf* で始め、闊達な自由さを出したい。21 ~ 22 上声部は、(a₁) としての音の動きを生かすために装飾音を揃えたい。
 - ・変奏3で、健康的な *B dur* から、悲劇性をおびた *f moll* に転調していく。22 の (a₁) に全曲最大のクライマックスがある。21 ~ 22 上声部に現れる (a₁) の塊ごとに大きく *cresc.* して、そのドラマチック性を高らかに歌い上げたい。
 - ・23 ~ 24 のカデンツで、クライマックスのエネルギーを穏やかに納め、*f moll* で変奏3を終える。
- 25 ~ 28
- ・変奏4では、劇的な *f moll* から穏やかな *As dur* に転調していく。装飾音も少なめで大人しい。
 - ・変奏4は、牧歌的で穏やかな雰囲気を出したい。次の主題の部分に橋渡しをするように、*mP* で、あまり起伏をつけないで流し、次の主題に続けたい。
- 29 ~ 32
- ・主題 25 ~ 28 は、主題 1 ~ 4 とほぼ同じような表現をするが、全曲最後の主題部分であり、下屬調でもあることから、*mf* で 1 ~ 4 より少々野太い表現がしたい。
- 32 ~ 38
- ・変奏5の (a₁) も (a₁) としての音の動きを生かすために装飾音を揃えたい。
 - ・(a₁) の塊ごとに、少しずつ *cresc.* していき、最後の (aT) でテンポをゆるめて、

堂々と曲を閉じる。カデンツとしては、あまりにもあっさりした終わり方をしてるので、*P*に納めるようなことをしない終わりを選んだ。

おわりに

「Sinfonia 5」は、装飾のあり方でずいぶん曲想が違って聞こえる曲である。バッハの時代と今では、鍵盤楽器の特徴が変わってきているので、筆者は、現代のピアノでバッハの作品を演奏する時は、多くの装飾音をつけることを好まない。しかし、「Sinfonia 5」では積極的に装飾音で遊びたくなる。「Sinfonia 5」の作品としての懐の広さゆえんであろう。

参考文献・参考楽譜・参考CD

*参考文献

- 市田儀一郎 1983年「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」(音楽之友社)
山崎 孝 1984年「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」(ムジカノーヴァ)

*参考楽譜

原典版

- Johann Sebastian Bach 「Klavierbüchlein für Wilhelm Friedemann Bach」Urtext (Bärenreiter-Verlag, Kassel 1979)
Johann Sebastian Bach 「TWO- and THREE-PART INVENTIONS」Facsimile of the Autograph Manuscript (Dover Publications, Inc., New York 1978)
BACH 「Inventionen und Sinfonien」Urtext (Bärenreiter-Verlag, Kassel 1972)
J.S. BACH 「Inventionen Sinfonien」Urtext (G. Henle Verlag, München 1978)
BACH 「INVENTIONEN UND SINFONIEN」Urtext (C.F. Peters coporation, Frankfurt 1933)
J.S. Bach 「Inventionen und Sinfonien」Urtext (Musikverlag Ges. m.b. H & Co., K.G., Wien 1973)
バッハ「インヴェンションとシンフォニア」原典版 角倉一朗校訂 (カワイ出版 1983)
バッハ「インヴェンションとシンフォニア」原典版 長岡敏夫編 (音楽之友社 1965)

校訂版

- J.S. BACH 「15 SYMPHONIEN」Hans Bischoff (Steingraber Verlag, Offenbach/M)
BACH 「TOW- and Three-Part Inventions」Ferruccio Busoni (G. Schirmer, New York 1967)
J.S. BACH 「Dreistimme Inventionen」Ferruccio Busoni (Breitkopf & Härtel Weisbaden)
BACH 「INVENTIONI TRE VOCI」Alfredo Casella (Edizioni Curci Milano 1946)
J.S. BACH 「Inventions à 2 et 3 voix」Durand S.A. (Editions Musicales, Paris 1957)
J.S. BACH 「Three-Part Inventions」James Friskin (J. Fischer & Bro. Belwin Mills 1970)
JOH. SEB. BACH 「15 Dreistimme Inventionen (Sinfonien)」Alfred Kreutz (B. Schott's Sohnen Mainz 1950)
BACH 「DVOUHLASÉ INVENCE A TRÍHLASÉ SINFONIE」Vilém Kurz (Editio Supraphon, Praha 1981)
BACH 「Three-Part Inventions」WM. Mason (G. Schirmer Inc New York 1967)
BACH 「15 INVENTIONI A 3VOCI」G.E. Moroni (Carisch S.p.a. Milano 1981)
BACH 「INVENTIONI A TRE VOCI」Bruno Mugellini (Ricordi 1983)
JOH. SEB. BACH 「ZWEI-UND DREISTIMMIGE INVENTIONEN」Julius Rötgen (Universal

Edition, Hungary 1951)

バッハ「二声部インヴェンション 三声部インヴェンション 小前奏曲・小フーガ」バッハ集4 井口基成 (春秋社 1983)

バッハ「インヴェンション」(音楽之友社 1955)

バッハ「インヴェンション」全音楽譜出版社出版部編 (全音楽譜出版社)

バッハ「インヴェンション&シンフォニア」ピアノ指導講座7 千倉八郎編 (日音楽譜出版社 1983)

バッハ「インヴェンション&シンフォニア 解釈と奏法」千倉八郎編 (日音楽譜出版社 1983)

J.S. バッハ「インヴェンションとシンフォニア」Hans Bischoff 角倉一朗訳 (全音楽譜出版社 1972)

*参考CD

Aldo Ciccolini (Piano) 「J.S. BACH INVENTION」 TOCE6601 (TOSHIBA EMI)

Christoph Eschenbach (Piano) 1979 「INVENTION & SINFONIA」 F26G20323 (POLYDOR)

Glenn Gould (Piano) 1989 「BACH INVENTIONS & SINFONIAS」 28DC5246 (CBS SONY)

Tatyana Nikolayeva (Piano) 1986 「J.S. Bach INVENTIONS AND SINFONIAS」 VDC-1079 (VICTOR)

Andárs Schiff (Piano) 1985 「J.S. BACH 2 & 3 PART INVENTIONS」 FOOL-23100 (POLYDOR)

高橋悠治 (Piano) 1991 「インヴェンションとシンフォニア 他」 COCO-7967 (NIPPON COLUMBIA)

田村 宏 (Piano) 1989 「J.S. バッハ インヴェンション」 CG-3722 (NIPPON COLUMBIA)

Kenneth Gilbert (Cembalo) 1985 「J.S. BACH INVENTIONEN UND SINFONIEN」 POCA-2113 (ARCHIV)

Gustav Leonhardt (Cembalo) 1992 「バッハ：インヴェンションとシンフォニア」 BVCC-1863 (BMG VICTOR)

Helmut Walcha (Ammer-cembalo) 1961 「J.S. バッハ／2声部のためのインヴェンション&3声部のためのシンフォニア」 TOCE-7231 (TOSHIBA EMI)

譜1 「Sinfonia 5」 BWV 791 [1]~[38] (楽曲分析)

第1部

主題

[1]

[4]

変奏1

[8]

変奏2

[12]

主題

[16]

第2部
変奏3

20

Annotations: aT, a₁, b, 4°, 2°, 2°, a₅, c, f:

23

Annotations: K, q×, 変奏 4, a₅, c, f: → As:

27

Annotations: K, q×, 主題, aT, b, aT, c, As:

31

Annotations: aT, b, 変奏 5, a₁, b, a₁, c, As: → Es:

35

Annotations: K, a₁, aT, c, Es:

譜2 「Sinfonia 5」 BWV 791 [1]~[38] (演奏解釈)

Adagio espressivo

1

p

4

mf *mp* *p*

8

第1部のクライマックス

mf cresc.

12

mp

16

mf

20

cresc.

全曲最大のクライマックス

23

f *mp*

27

mf

31

mp *cresc.*

35

f

堂々と

少々テンポをゆるめる

譜3 「Sinfonia 5」 BWV 791 [1]~[38] (上声部装飾音)

The image displays a musical score for the upper voice of 'Sinfonia 5' (BWV 791) by J.S. Bach. The score is presented in a single system with a treble clef, a key signature of two flats (B-flat and E-flat), and a 3/4 time signature. The music is divided into measures, with measure numbers 1, 5, 10, 14, 17, 21, 25, 29, and 34 indicated in small boxes at the beginning of their respective lines. The notation includes various rhythmic values, including eighth and sixteenth notes, and rests. There are several instances of triplets, marked with a '3' below the notes. The score concludes with a double bar line at measure 38.

譜4 「Sinfonia 5」 BWV 791 ①～③⑧ (中声部装飾音)

①

3

⑥

3

⑩

3

⑮

⑳

㉕

⑳

3

㉔